

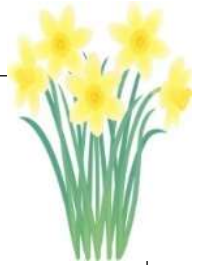


# 高大連携室だより

首都大学東京  
(2020年4月より大学名称を  
 東京都立大学に変更する予定です)  
 アドミッション・センター  
 高大連携室

やわらかな春の日差しがうれしい季節になりました。

アドミッション・センター高大連携室では、本学の質の高い研究・教育を高校生・先生や保護者に紹介するとともに、主体的に学ぶ姿勢の大切さや大学生活のすばらしさを伝え、高校生が自信をもって進路を選択し、その先の輝く未来に向かって羽ばたくことができるよう支援を行うことを目的として活動しています。今後、この「高大連携室だより」とおし、将来を担う生徒/学生の健やかな成長に向けて、高校と大学が連携して行っていく取り組みについて紹介していきます。



高大連携室では、平日・土曜日や大学説明会等での個人来訪者の相談対応のほか、高校等との連携により、2019年度に約7,000名の高校生や保護者の支援を行いました。大学の組織でありながら、大学院生スタッフを中心に活動している点が他大学ではない大きな特徴です。

## なぜ、いま、高大連携なのでしょう？～高大接続とは



高大連携室室長  
 河西 奈保子 教授

### あるギャップ 高校と大学の間に

高校を卒業したら大学に進学するもの、と多くの高校生は考えています。また、大学が「自ら選んだ課題に取組み解決する場所」「主体的に学ぶことが求められる場所」ということを知らずに、『高校までと同じように、先生から知識を教えてもらう場所』だと思っている高校生が少なからずいます。

そして大きな問題は、「高校は受験勉強をする場所」と考えて、偏差値の高い大学を目指してひたすら受験勉強に励んだ高校生です。大学入学後に目標を見失うばかりか、これからの人生を歩むために必要な「探究心」「未知のことを考え抜く力」を大学で培うことに苦労することになります。

一方、新入生をむかえた大学でも、戸惑うことが増えています。レポートを書かせたのに感想文を書いてくる、教科書や数式を理解できない、教えてもらうのを待っている、そして、大学で自分が何をやりたいのかわからない。

## 高大連携室が高校・大学の多くの方に協力をお願いするわけ

### 大学の立場・高校の状況

新聞等で多く採りあげられるように、社会は大きく変化しています。2007年に日本で生まれた子どもの半数は107歳まで生き\*、2011年にアメリカの小学校に入学した子どもの65%は今では存在していない職業に就く\*\*とも言われています。\*リンダ・グラットン(2017)、\*\*キャシー・デビッドソン(2011)

大学は、より社会に近いと、これからの日本や世界で必要な能力について意識する機会がとて多い場です。研究者でもある大学教員は、社会に役立つ最先端の成果を目指し、学生と共に研究を発展させます。また大学では、就職活動に備え学生の社会人基礎力をも養います。

一方、高校では、保護者の意識と少子化の影響が相まって、入試と偏差値中心の教育を変えることが難しくなっています。そのため社会の変化に気づきつつも、現役合格と入試実績重視の受験学力優先の学習指導で、生徒の自主的な意欲ある学習機会が妨げられる状況もあります。

このような高校と大学の状況の中で、高校生が大学入学時からスムーズに力を伸ばせるよう「高大接続」という言葉が生まれました。高校生に向けた「高大接続」の本質的な役割は以下の3つです。

- ①大学の役割や高校との違いを理解すること。
- ②学問への関心を高め進学意欲を持つこと。
- ③充実した大学生活のために高校時代に育むべき力を意識すること。

### 高大接続のための高大連携

そしてシームレスな人材育成「高大接続」を行うために重要なポイントは2つです。(1)「考える」「行動する」力を育むよう**高校の教員が高校生に継続的に働きかけること**、そして、(2)**大学内の教職員の協力**を得て学問の魅力を高校生に伝えること、です。

高大連携室では、高校や大学の多くの方々のご協力のできる「高大連携」によって、高校生が将来、大学や社会で活躍できる基盤づくりに貢献できると期待しています。

高大連携室室長 河西奈保子(大学教育センター)

## 大学院生が高校生の探究学習を支援する

高大連携室3年目となる今年度は、主に都立南多摩中等教育学校において、同校が推進するライフワークプロジェクト（自己課題探究）のTA（ティーチングアシスタント）として活動しました。担当した学年は、中等4年生（高校1年生相当）で、1年間を通して、テーマ設定→リサーチ・クエスチョン作成→仮説設定→検証→ポスター作成→発表に至るまでの指導を行っています。

私自身は、大学院で日本史を専攻していますが、同校で担当した生徒の研究分野は、歴史・地理・民俗・文化・心理など多岐に渡ります。「授業は生き物だ」とよく言われますが、生徒個人が自由にテーマを設定する課題探究は、まさに「生き物」のようです。「調べ学習で終わらせないためにはどうすれば良いか」、「どのように生徒のモチベーションを高めていくか」など悩みは尽きず、気付けば授業を通して私自身も多くの「探究」をしていたように思います。もちろん苦勞する場面も多々ありましたが、生徒たちがひたむきに自身の課題と向き合う姿からは、同じ「研究者」として大いに刺激を受けました。

このようにやりがいを感じる一方で、生徒が自由な発想で考える研究テーマには、現場の教員だけではどうしてもカバーしきれない専門的なものもあり、そこをどのようにフォローしていくかが1つの課題になっていると感じました。こうした「探究的な学習」をめぐる学校現場における「課題」を解決する1つの方法が、「高大連携」事業に期待できるのではないかと考えています。

院生スタッフ 松島裕大(人文科学研究科 文化基礎論専攻 博士後期課程1年生)



高大連携室  
大学院生スタッフ  
松島裕大

## 高大連携室での経験を通して



高大連携室  
大学院生スタッフ  
星智子

私にとって高大連携室での活動は、中学校や高校の教員になりたいという大学入学当初からの思いを強くするものでした。

高大連携室では、高校生・既卒生・保護者を対象に個別相談を行っています。受験や大学のことに限らず、「いつも大事なときに緊張してしまう」「将来やりたいことがよく分からない」「自分の進みたい進路を親に反対される」といった相談もあります。私たちスタッフはそのような悩みに対する答えとして、マニュアルを作っているわけではありません。初めは、どう答えるのが正解なのだろうと困ってしまうこともあり、「こんな相談があった」とスタッフ同士で話す中で、私は、正解は一つではないと思い、不安や悩みをよく聞くことを心掛けるようになりました。生徒と一緒に悩み、一人ひとりに寄り添う教員になりたいと思っています。

個別相談だけでなく、探究学習の支援において高校生と接する機会や、高校の先生方の話を聞く機会を通して、教員になりたいという思いを強くしました。また、チームとして活動すること、仕事のやりがいや責任を学んだこと、学部を越えた様々な学生と出会えたことは、私にとってとても豊かな経験でした。

2年間の活動で、多くの高校の先生方、首都大の教職員の方々、高校生の先輩である首都大生の方々にお世話になりました。ありがとうございました。私は4月から、教員として中高生と関わっていくこととなります。上手くいくことばかりではないと思いますが、高大連携室での経験を糧にして、生徒と真摯に向き合っていきたいです。

院生スタッフ 星 智子(理学研究科 数理科学専攻 博士前期課程2年生)



### 首都大学東京 アドミッション・センター 高大連携室

首都大学東京は、2020年4月1日に大学名称を東京都立大学に変更する予定です。

東京都八王子市南大沢1-1 首都大学東京南大沢キャンパス 1号館106室

開室：平日10時～17時 土曜13時～17時（祝日／入試日を除く）

● TEL:042-677-2015 ● Mail:koudairg@tmu.ac.jp

HP

ホームページ



Twitter



Instagram



TMU.KOUDAIRENKEI